依 頼 論 文

◆企画：第 125 回学術大会／臨床リレーセッション 2, 3「インターディシプリナリーデンティストリー ー補綴歯科専門医は他分野から何を求められているかー」

インターディシプリナリーデンティストリー —補綴歯科専門医は他分野から何を求められているか—

藤澤政紀[a]，近藤尚知[b]

Interdisciplinary Dentistry −What are the accredit prosthodontists expected from the dental practitioners in the related field?−

Masanori Fujisawa, DDS, PhD[a] and Hisatomo Kondo DDS, PhD[b]

補綴歯科治療を成功に導く鍵のひとつに，関連領域とのインターディシプリナリーアプローチをどのように行うか，という点が挙げられる．いくつかの異なる学問分野にまたがって関わることがインターディシプリナリーであることを考えれば，歯科臨床を行う場合，様々な見地から必要な治療ストラテジーを選択し，組み立てることとなる．しかしながら，補綴歯科治療に際し，ここからは補綴の治療，ここまでは補綴前処置と線引きして臨床を行うとも考えにくい．即ち，歯科臨床の中では，いずれも患者に対する最善の治療法を無意識のうちに選択し実施していることが多いものと思われる．このことは，視点を変えると，補綴専門医が補綴関連領域の選択肢の幅を拡げることで，治療の選択肢が拡大し，患者の満足度が高まることに繋がるものと考えられる．

第 125 回学術大会の臨床リレーセッションでは矯正の立場，インプラントを中心とした外科的立場から講演をいただき，これを引き継ぐ形で，歯周治療の立場，歯内療法の立場という切り口でディスカッションが進められた．本企画の前半では，船登彰芳先生からはインプラント専門医の立場から，骨造成法について解説していただき，前田早智子先生には矯正医の立場から矯正治療を行うべき症例についてご教示いただきながら，前処置のあり方について討論が行われた．そして細川隆司先生からは，補綴治療だけでも解決可能であるが，矯正治療などの介入で，より理想的な補綴装置を装着することが可能となることを解説していただいた．そして，今後われわれは，補綴医としての限界を知り，それを患者に伝える勇気をもち，各領域の担当医同士でより活発なコミュニケーションをとりながら，患者中心の歯科医療を実践すべきであることを確認した．

また、本企画の後半では，鈴木真名先生に歯周病の立場から，ソフトティッシュ・グラフトにより欠損顎堤の条件を改善し，補綴治療のクオリティを高めるための鍵としての歯周外科処置を解説していただき，木ノ本喜史先生には根管充填後の歯冠側からの漏洩（コロナルリーケージ）を中心に，補綴装置の適合性と根管治療の予後について解説していただき，最後に窪木拓男先生にはこれらのアプローチを踏まえた，補綴の立場からまとめていただいた．

歯学部における卒前教育では，補綴治療に入る前段階に実施する関連領域の処置を補綴前処置として教育しているが，治療成績を大きく左右するこれらの治療は，無論「前処置」という括りでは適切に把握できるものではない[1]．補綴治療前，治療中，治療後を通してその必要性を実感することが少なくないことから，今一度，インターディシプリナリーなアプローチの必要性に対する認識を深める一助になるものと思われる．

文　献

1）藤澤政紀．「補綴前処置」という言葉からインターディシプリナリーのありかたを考える．QDT Art & Practice 2016；41：1530.

[a] 明海大学歯学部機能保存回復学講座歯科補綴学分野
[b] 岩手医科大学歯学部補綴・インプラント学講座
[a] Division of Fixed Prosthodontics, Department of Restorative & Biomaterials Sciences, Meikai University School of Dentistry
[b] Department of Prosthodontics and Oral Implantology, School of Dentistry Iwate Medical University